

畜産資源送別会

去る3月24日、畜産資源から卒業される皆さんへの送別会が、お馴染みE-303にて行われました。事前の準備不足に、はくび会送別会の中止なども重なり、直前までバタバタしてしまって申し訳なかったです…。イベント係さんが普段いかにしっかり準備されているのかを再認識させられました。今年度は竹内さん・児嶋さん・柳さん・中川さん・加藤さん・荒木さんの6名が畜産資源を卒業し、新たな活躍の場へと旅立っていきました。

送別会では、まず卒業生の皆さんに後輩たちから花束の贈呈を行いました。この花束を手配してくれた西田君は、なぜか既に真っ赤な顔でした。きっとお世話になった方々に花束を渡すのが照れくさかったのでしょう。かわいい奴です。

その後広岡先生より、研究室に残るメンバーからのメッセージを書いた色紙を一人一人に渡していただきました。昨年と比べると本当に簡素なものになってしまって恐縮ですが、皆さんからの想いはしっかり込められていますので、ぜひ額に入れて玄関先にも飾って



ただきたいですね☆(笑)

次いで卒業生から「ちくし缶バッジ」をプレゼントしていただきました。これには広岡先生も、「一体感が生まれる！」と大絶賛でした。本当にありがとうございます！

最後に皆で記念撮影を行って、送別会はハーフタイムを迎えました。卒業生のうち、加藤さんが参加できなかったことは残念でしたが、その他は全メンバーが集まって送り出すことができ良かったです。畜産資源を卒業される皆さん、今まで本当にお世話になりました！またいつでも研究室に顔を出してくださいね♪



さて送別会後半戦については別記しておりますのでご参照ください。

後半に続く (いっしー)



目次:

広岡先生の随筆 @虎穴に入らずんば 虎子を得ず	2
昨年度の総評と 今年度の抱負	3
論文掲載情報	4
研究室模様替え	4
桜の咲くころには	4
アジア山羊の会設立	5
お知らせ	6

2011年3月11日の『東北地方太平洋沖地震』は、日本に大きな爪あとを残しました。マグニチュード9.0を記録した地震と、それによって引き起こされた津波により、死者・行方不明者は3万人にのぼり、地震で影響を受けた原子力発電所の損傷による放射能漏れの危険性により避難指示を受けた人々を含む避難生活者は一時、55万人に上りました。当日関東方面へ行っていた畜産資源のメンバーの中には、一時帰宅難民となった人もいましたが、怪我などはありませんでした。メディアから流れる映像は、忘れられない光景です。犠牲となった方々と動物達のご冥福をお祈りするとともに、被災者の方々の一日も早い復興を願って止みません。

巣立ったメンバーからのメッセージ①

おかげさまで
なんとか修了までいきました。
3年間で
飲酒量が増えました
体重が増えました
麻雀を覚えました
色々な人に会えました

長命さんと同じ年に見えると言われました
畜産が面白いと思えました
その他もろもろありましたが
収支とんとはないでしょうか
修士だけに
お後がよろしいようで・・・

(うな)

好評連載 広岡先生の随筆

④ 虎穴に入らずんば、虎子を得ず



私が渦中の栗を拾うのが好きだと話すと、多くの学生たちは引いてしまう。しかし、ずっと昔から私はおせっかいなところがあって、他人の争い事に、つい口を出してしまいたくなる。言葉は悪いが、時には他人の争いごとを見ると、わくわくすることもある。ところが、いまどきの学生たちにとっては、それでなくとも、煩わしいことには関わりたくないのに、自分から関わって行くと言う私の態度は、まったく理解できないよう



である。

しかし、私のような性格は、研究者には必要な資質の一つと考えている。研究は、そもそも、未知なものの、矛盾したものを追及する行為で、特に他の研究者間で議論になっている問題の解決を目的に研究すると、成果を得やすい。したがって、他の研究者の議論に口を突っ込むことは、重要な研究のモチベーションとなる。

私は、これまでの人生を振り返って、「すべき」か「せざるべきか」を悩んだ時には、せずに後悔すると思えば、必ずするようにしている。この事は他人から見れば無謀に見える場合も、私は私なりの見立てで勝算があると考えている。実は、私は慎重な人間で、当然、勝算のないと判断したことや後悔すると思ったことは、絶対にしないようにしている。実際、して後悔が残るようなことは、しなくとも後悔は残らないであろうし、せずに後悔が残ることは、すなわち勝算の高いことである。

大学では、主として、4回生から修士の2回生までの学生を指導している。毎年一人ぐらいは博士課程に進学するものがある。この時期は、学生たちにとっては、就職を決める、人生で最も重要な岐路に行き当たる時期である。そのような人生の岐路において、いかに正しく進路を決めるかは、その人にとって最も重要な資質である。

人生においては、ある程度のリスクをとることは必要である。リスクや責任を回避してばかりしていると、必ず運に見放され、失敗する。しかも、経験上、リスクをとる時には、確信的に行うことが肝要である。とすれば、自分の責任を軽減しようと、他人に相談し、失敗してしまった場合、後に、その人のせいだと陰で言うものいるが、そのような小細工は、かえって、運を逃し、悲劇を招くことになる。相談することはよいが、最終的には、毅然として、自己責任で物事を行うのが成功のコツである。

リスクをとるかどうかは、確率的に考える必要がある。よく知られているように、統計学の世界では、20回に1度の過ちは認めることにしている。つまり、5%の確率で、思いどおりにならないことが起こると仮定するところから、統計理論は始まっている。私は、何かを行う場合、勝算が80%以上で、失敗してもダメージが致命的でない場合に、それが本当にしたいことであれば、するようにしている。一方、成功する確率が30%以下のことは、なるべくしないようにしている。しかし、当たり前なことであるが、失敗してもほとんど影響のない時には、確立に関係なく無条件ですべきと考えている。よく、自分が傷つくことやプライドを失うことを恐れて、行動しない学生がいるが、自分のプライドが損なわれるぐらいならば、絶対に行動すべきである。若いうちは、プライドというものは、傷つけられれば傷つけられるほど、成長できるものである。

私は、学生から判断を求められたときには、このような考え方をベースにアドバイスすることになっている。しかし、問題は、勝算が30%より大きく、80%未満の時である。このようなケースでは、学生諸君自身に判断をしてもらわざるをえない。起こり得る可能性についてはアドバイスできても、最終的な判断は、自己責任で決めてもらわざるをえない。このような局面で、リスクとベネフィットを秤にかけられる能力を、日頃から養っておくことが重要である。

「虎穴に入らずんば、虎子を得ず」の格言は、ある意味、真理を表している。人は、ある程度のリスクを覚悟して始めて、大きなものを得られる。面接を受けなければ、その企業には絶対に入れないし、また、どちらかが告白しなければ、本当の意味の男女交際は始まらない。

渦中の栗を拾うことは、直接自分にメリットがないように見える。しかし、自己のメリットと関係のない行為をしたときに、本当の意味で、人の信頼を得られるものである。そのような積み重ねが、回り回って、その人に幸運をもたらすことになる。無条件の奉仕活動をきらい、妙なプライドからか、他人へのお世話を金銭的に考える人が多いが、実は、見返りを期待しない無条件の奉仕ほど、他人に価値を認められやすいものはない。この事は、意外と知られていない事実である。

広岡博之

昨年度の総評と今年度の抱負

【広岡先生】

昨年度は、私は学科長の仕事に追われ、われわれの研究室は未曾有の学生数となったため、ある意味、本当に大変な1年であった。しかし、終わってみれば修士2回生も4回生もよい研究をしてくれたと思っ



ている。特に修士2回生諸君の研究は、加藤君の研究がJournal of Animal Scienceに掲載され、また柳君の研究は、現在impact factorが3以上の国際雑誌の審査を受けているところである。さらに、中川さんの研究は、将来、Science、Nature、PNASあたりへの投稿を考えている。酒井君の研究は、ネパールの苛酷な研究環境の中で試行錯誤しながら、よくまとめられたと思っている。チッチさんの研究は、熊谷先生の指導のもと、内容の修正に鋭意努力しているところと聞く。4回生の卒業論文は、いずれも将来性のあるものであった。

また、昨年は、賞のラッシュであった。児島君が春のシステム農学会の発表賞を獲得し、その後、加藤君と長命君が秋のシステム農学会の発表賞を獲得した。年間4人の受賞枠のうちの3人が、われわれの研究室の関係者であった。さらに、3月の畜産学会では、長命君が畜産学会奨励賞を授与され、畜産草地研究所の荻野さんの畜産資源で行った研究が、Animal Science Journal Excellent Paper Awardを獲得した。

最近の話題としては、苦勞した大石先生の論文が、連続して2本、伝統のあるJournal of Agricultural Science誌と家畜栄養・飼料学において有名なAnimal Feed Science and Technology誌に掲載されることとなった。3月には塚原さんが、無事、博士となった。

このような研究室の発展は、10年前にはお荷物研究室と呼ばれていたことから想像もつかないことで、私自身、本当にみんなの頑張りと努力の結果と思っている。しかし、今年は、その中核を担っていた諸君の多くが、研究室から巣立つこととなり、大きな転換点を迎えることとなった。今の修士1回生の諸君はぜひ、今後の畜産資源を引っ張ってゆくぐらいの気概をもってほしい。

今年度の抱負としては、何とか中川さんの研究を改良して、1本でもよいので、impact factorが10を超える雑誌に掲載できるように頑張りたいと考えている。



【熊谷先生】

口蹄疫と震災の発生が象徴する一年でした。この2つの災害の発生とその対応は、被害の性質や規模の差はあるものの、いくつかの共通した問題を我々に突きつけました。一つは災害発生に対する危機管理の問題、いま一つは災害発生後の対応と国民に対する情報公開の問題です。福島の子力発電所事故にしても宮崎の口蹄疫発生にしても、有効なシステム—私益に与しない専門家

が真摯に情報を収集し、あらゆる事態を想定して対策を立て、ひとたび事故が起これば最速・最善の方法を持って事故の収束に努め、正確な情報を逐次伝える—が働いていたとは到底考えられません。

我々大学教員は私益に最も与しないゆえに、曇りのない目で情報を得て社会に対して公正に情報発信できる希少な人種です。このスタンスを活かして社会に問いかけていく姿勢は取り続けていきたいと思ひます。

【大石先生】

昨年度は、自身としてはいろいろと喜ばしいことがあったのですが、年度末の未曾有の大震災でその気持ちも吹き飛んでしまったような気がします。ただ、昨年度を通して見ると、研究室のメンバーは随分と研究をしっかりとってくれたと思ひます。特に、昨年度研究室を去ったメンバーのほとんどがそれぞれの研究テーマで僕と直接的に深く関わり、多くの議論を行い、論文を執筆してくれました。ひとりひとりにコメントを書いてしまうとたくさんの思い出があってキリが無くなりそうなので、ここではあえて述べませんが、本当に良くがんばってくれたと思ひます。そういったメンバーが数多く去ってしまい、研究室としては随分と寂しい感じにもなりましたが、いまは寂しさよりも去ったメンバーがそれぞれの道で自分の思うままにがんばって行って欲しいという応援の気持ちで一杯です。研究室を離れたみなさん、これからの人生を存分に楽しんで、がんばって！またふらりと京都へ遊びに来てくださいな。

今年度は心機一転、新たに加わる2人の4年生とともに、今まで以上に楽しくがんばって研究を行なっていきたいと思ひます。その中で学生のみなさんに意識して欲しいのは、昨年も述べたことですが、縦のつながりと横のつながりを大事にして、みんなでお互いの研究を洗練したものにしていって欲しいということですが、畜産資源学分野の研究をざっくりと眺めると、実験系やら統計解析やらシミュレーションやら、方法論的には一見ばらばらのようですが、家畜生産における資源の有効利用を検討するという概念的な視点では、みんなどこかでしっかりとつながっています。そのため、お互いがそれぞれの研究テーマに興味を持ち、ゼミで他の学生の発表を聞いたらどんなことでもいいのでいろいろ質問し、ゼミ以外でも学生同士で議論を重ね、上回生は先輩にしっかりと研究指導を行い、それぞれの研究テーマに対して分野全体で問題解決に取り組んでいこうという気持ちを持って欲しいと思ひます。個々の研究に対してそれぞれが個人として責任を持って研究を行なうのはもちろん大事なことです。同時に、お互いで切磋琢磨しつつグループとして取り組む姿勢ももう少しあって欲しいと思ひます。飲み会やマージャンはみんなで行った方が楽しいのと同様、研究もみんな議論しあうと楽しいですよ。



下線部はどういうことをいっているのか、わかりやすく説明せよ。

.....
.....
.....

「おれはもう古いぼれだ、どこへゆくところがあるろう？
慈恵院へも入れちゃくれねえ.....おら血も流さな
きゃ、祖国を救いもしなかつたからなあ。しかも目の奴め
—畜生め—針を手にとりあげてみても、針もみえね
え.....糸もみえねえ。だからさ、な、若えの、おら役
にもたたぬところをいつも無駄に縫ってるんだ.....ただこの手、手だけがおれを
欺さねえんだ.....」

.....
.....
.....

(長田弘『失われた時代』より)

平成23年度京都大学入
試2次試験
国語の設問より

さっぱりわかりません。
長文でお手数おかけしますがよろしく願いいたします。

()

☆ベストアンサーに選ばれた回答

hkumaさん

単調なカニューレ装着手術を行ってきた研究者にとって、自らが日々営む手仕事によって得られる生きる実感は、若い頃に比べて技術が衰えても、決して揺るがないということ。

論文掲載情報

畜産資源から2本の論文が国際学会誌に掲載されました！

Oishi K., Kumagai H., Hirooka H.
2011.Application of the modified feed formulation to optimize economic and environmental criteria in beef cattle fattening systems with food by-products.
Animal Feed Science and Technology,

Available online 21 March 2011.

Kato Y., Ito M., Hirooka H. 2011. Genetic parameters of serum vitamin A and total cholesterol concentrations and the genetic relationships with carcass traits in an F1 cross between Japanese Black sires and Holstein dams. **Journal of Animal Science,** 89: 951-958.

研究室模様替え

来るべき新年度に備え、E-307では3月22日に模様替えを行いました。この部屋からは4人の方が卒業され、春からはマレーシアのプトラ大学よりDahlan教授がいらっしゃるため、大幅なお部屋改造となりました(当日の模様替えに参加できなかった僕は、翌日入室して開口一番「...僕の席はどこですか??」と尋ねてしまったほどです)。

まだまだ寒い日が続く中でも、少しずつ春の足音が聞こえるようになってきた今日この頃。研究室にも少しずつ“新しい季節”が近づいてきていることを、しみじみ感じてしまいました。(いっしー)

広々明るくなった
E-307→



桜の咲くころには

京都では日を増すごとに陽気な天気が多くなり、はっきりと春を感じることができます。

震災復興の最前線で尽力されている皆さまへ大変御苦労さまです。

本当に厳しい環境の中、お疲れ様です。そして、何よりもこの国のために有難うございます。

本日新聞紙上で、「こんな状況だからこそ、西日本がしっかりしなくては」というある首長の声に掲載されていました。

私もその通りだと思います。

自粛や中止という言葉が方々で聞かれますが、必ずしもすべてをSTOPする必要はないような気もします。

活力を取り戻すには、誰かが何かを動かしてい

かなければいけません。

判断が難しいところもありますが、光を見出そうという気持ちがあれば、私は少しずつ活気づけていくという行為も必要だと思います。

もうすぐ京都は桜が咲き始めます。

思わず息をのむような美しい桜並木に、過去私自身が何度元気づけられたことか。きっと、桜は日本を元気づけるために今年も満開になるはずですよ。

少しずつでもいい。

桜が満開になるころには、今より少しでも日本が元気になるように。

そんな想いをもって、明日を迎えたいと私は思います。

(さかい)



畜産資源送別会（打ち上げ後半戦）

色紙、花束の贈呈が終わると皆さんお待ちかねの宴の時間です。今回は、はくび会の送別会が自粛となったため、用意されたオードブル等は各研究室での山分けということに。早速、少しでも酒の肴になるものをいただきにと、我がちくしの精鋭達を送り込みました。彼らが持って帰ってきたものは寿司皿一杯の「おでん」。「おでん」で酒が飲めるか～、酒の肴はやっぱり「おでん」じゃね、など様々な意見が飛び交いましたが、我が精鋭達は考えていました。その「おでん」を小分けにして他の研究室へ物々交換に行き、焼きそば、春巻きをゲットしてきたのです。



M1中心になって用意してくれた豪華な料理とともに今年度最後の宴は、熊谷先生の乾杯の挨拶とともに始まりまし



た。途中、生態機構や生殖、遺伝育種、栄養の研究室の面々と合同となり、大いに盛り上がりました。夜遅くまで大きな笑い声や奇声が建物中に響いていたとか…

忙しい中準備をしてくれたM1に感謝します。竹内さん、児嶋くん、加藤くん、中川さん、柳くん、荒木さん、お疲れ様でした。皆さまの活躍を期待しています。お歳暮、お中元も同様に期待していますよ～。

(さかい)

協力隊活動

『畜産の研究』では、2010年新年特集号から「青年海外協力隊の舞台」と題して、これまでに獣医・畜産分野の協力隊員として世界各地の発展途上国で活躍したOV (Over Volunteer) たちの経験談を連載しています。個々の協力隊員たちが味わった、任地での苦悩や葛藤と、協力隊活動を通じて学んだ様々な事柄が描かれています。たかがボランティア、されどボランティア、です。我が畜産資源学分野にも現在2人の協力隊出身者が在籍していますし、京大内には、多数の協力隊関係者が潜んでいます(^.^)。それぞれの隊員にそれぞれのストーリーがあります。興味のある方は、農学部図書館へ！

アジア山羊の会設立

3月7日、台湾北部の名勝地、淡水の雅歌会館にて、『アジア山羊の会 (APGA: Asian Friendship for Goat Affairs)』発足式が開催されました。この日、日本からは長野實先生(元日本大学教授)率いる6名と、台湾各地から37名の山羊研究者、生産者、支援者を含む計43名が発起人として集まり、発足式に臨みました。

この会の創立趣旨は、アジア地域内の山羊文化の交流を通じて山羊産業の振興を図り、アジア人の友情と福祉を促進することにあります。具体的には、各国単位での山羊に関する学術・産業・文化交流会(日本では全国山羊サミット)など山羊イベントのインターネットを通じた情報提供など、お金のかからないネットワーク作りが中心となります。会則も会員の意見を聞きながら徐々に作られていく予定です。

発足式では、理事長として元日本大学教授の藩英仁先生(台湾および日本在住)が満場

一致で選任され、理事長から指名を受けた長野先生と黄政齊氏(恒春畜産試験場長)が、それぞれ日本側と台湾側の



発起人を紹介した後、創立宣言が出されました。その後は、発起人一人ひとりが発会宣言書へ署名し、役職会員入会費(日本人1万円、台湾人3,000元:いずれも暫定額)を納入して乾杯、めでたく発足となりました。

司会は、台湾農業経営管理学会常務理事の林淵煌氏が務められ、日本大学生物資源科学修士出身の吉成志麗さんが通訳を担当されました。

長野先生の「小さく産んで大きく育てる」というお言葉通り、この会がアジア全土に広がるといいですね。

(ようこ)

春の味覚

イチゴ狩りに行ってきました！イチゴの季節は5月だとはばかり思っていたが、ほとんどのイチゴ農家さんがハウス栽培なので、イチゴ狩りのシーズンは12月～4月のようです。3月は最盛期で、ちょっとお値段も安く1300円食べ放題でした。イチゴで満腹、幸せいっぱい腹いっぱい♪



Department of Animal Husbandry
Resources, Kyoto University,
Faculty of Agriculture
Oiwakekyo, Kitashirakawa,
Sakyo-ku Kyoto 606-8502 Japan

電話 075(753)6365

FAX 075(753)6365

http://www.animprod.kais.kyoto-u.ac.jp/

GOAT BULLETIN



GOAT BULLETINは、皆様の投稿記事で
成り立っています。形式・文字数は問いません。
また、読者の方々からのご意見やお問い合わせ
も大歓迎です。下記のアドレスまでどしどし
送信してください。

E-mail: yoko3t@kais.kyoto-u.ac.jp

お知らせ

今月のゼミ

いよいよ平成23年度のゼミが始まります。今月のゼミは、

4月12日(火) オリエンテーション 14:45-16:15

4月19日(火) 安在・西田(文献紹介) 14:45-16:15

4月26日(火) 岸・三輪(4回生演習) 14:45-16:15

の予定です。場所については、後ほどご連絡します。

ゼミ係り

Dahlan先生来日

マレーシアプトラ大学のDahlan教授が、3月25日より2ヶ月の予定で
当研究室へ客員教授として在籍されています。Dahlan先生はシステム
農学がご専門で、1989年に当研究室で学位を取得され、1995年にも
日本で研究をされています、今回で3度目の来日、どんなお話がうかが
えるか楽しみです。

研究室の動向

3月末までに、竹内さん(D2)、児嶋君(D1)、加藤君(M2)、中川(智)さ
ん(M2)、柳君(M2)、荒木さん(B5)が畜産資源から巣立ちました。皆さ
んそれぞれの進路でのご活躍を祈念しています。平成23年度は、塚原さんが
教務補佐員として研究室に留まり、酒井君、チチさんが博士課程へ進学、安
在君、前野君、西田君が修士課程へ進学、そして新たに事務補佐員の久保さ
ん、2人の4年生(岸君、三輪君)を迎え、総勢18名となります。

！速報！ 畜産資源修了生の入江(旧姓上原)幸さんが、3月に元気な
赤ちゃんをご出産されたそうです。おめでとうございます♪



2011年 4月の飼育当番表

日	月	火	水	木	金	土
3/27	28	29	30	31	4/1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

ヤギ係り春休み中に付き
しばらくお待ち下さい

編集後記 今回起きた甚大な災害で『見えないものの恐ろしさ』を痛感しました。原子力発電所の事故では、原発がどういう仕組みで動いているのか、放射能がどういうものなのか、どのような事故が予測されるのかが見えず、不安と苛立ちを覚えました。燃料・物資はあるのに被災地へ届けられるルートがいつ回復されるのかが見えず、被災した方々は大きな不安を抱えられたことと思います。リソースの見えない情報(噂)の流布が、人々の不安を掻き立てました。正確な情報を一つ一つ得ることの重要さと難しさが、現代の課題だと強く感じました。